

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 服従と妥協のイングランド宗教改革 研究回顧と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 指, 昭博, Sashi, Akihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2603">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2603</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 服従と妥協のイングランド宗教改革

## 研究回顧と課題<sup>1</sup>

指 昭博

### はじめに

イングランドの宗教改革を研究テーマに選んだのは、学部生の頃からなので、40年以上取り組んできたことになる。今、神戸市外大を退職するに当たって、自分の研究を振り返り、イングランド宗教改革の見方や位置づけについて概観しながら、現時点でのイングランド宗教改革史像を「服従と妥協」をキーワードにして述べてみたい。

### 伝統的イングランド宗教改革像

1980年頃までのイングランド宗教改革といえば、プロテスタント勝利の歴史であり、殉教と弾圧への勝利の歴史として描かれていた。イングランド国教会とは、「正しい」信仰のために英雄的な死を遂げた人々の犠牲の上に築かれた「正統な教会」であった。

そこで焦点となったのが、「カトリック反動」により人々の怨嗟の的となったとされたメアリ時代である。メアリ時代に信仰の故に処刑された殉教者はプロテスタントの正しさの証明であり、エリザベスの「解決」にいたる「最後の試練」とされた。多くの概説書がメアリ時代を無視し、宗教史では、エドワード6世時代の叙述からエリザベス治世につなげられ、「無意味な時代」として叙述すらないことも珍しくなかった。

なぜメアリ時代の殉教者は正しい信仰の担い手とされたのか。それは、キリスト教の根底にある、殉教を信仰の正しさの証しとみなす、「殉教史観」ともいべき発想で、神の子であるはずのイエスが処刑されてしまった「理由」を説明するための論理である。信仰が公認される以前のローマ帝国での迫害もまた、その正しさを証明するものとみなされた。イングランドではJ・フォックスの『殉教者の書』がその伝統の上にたち、メアリ時代の殉教者を信仰の正しさの証人として称揚したのである。このフォックスの書が、今

日に至るまでのメアリ時代像の定着に決定的な役割を果たすことになった。

メアリ時代の評価の低さは、ひとえにそのカトリック復活にあることは間違いない<sup>2</sup>。つまり、旧弊なカトリック教会に対して清新なプロテスタントが勝利を収めるという構図である。この新旧対立という理解は、かつて日本でも旧教・新教と表記されたことにも表れているし、その「新旧」という対比には、克服されるべき悪弊としてカトリックが理解され、教科書の宗教改革についての叙述にも根深く残っていた。『殉教者の書』には歴代ローマ教皇の傲慢さや墮落が列挙されているが、『殉教者の書』の挿絵が20世紀日本の世界史の教科書にも登場していたように、そうしたバイアスのかかった評価が、遠く時空を超えて現代の日本にまで影響していたといえる<sup>3</sup>。

### 英雄史観／殉教史観への疑問

英雄的な行為や悲劇的な出来事への共感は普通にみられるものであるが、歴史研究において、単純な共感は危うさを伴う。イングランド宗教改革の中でよく取り上げられるのは、ヘンリ8世に抗い処刑されたトマス・モア、メアリ・ステュアートの悲劇、そしてメアリ時代の殉教者であるが、前二者がカトリック信仰に殉じたとされるのに対して、メアリ時代の殉教者はプロテスタント信仰を守ったとされる人々である。宗教改革の是非を基準とするなら、相容れないことになる。個々人の振る舞いや人間性を評価の基準に据えると、歴史研究としては視点が定まらず、必ずしも適切とはいえないだろう。

メアリ時代の研究は、「カトリック反動」というレッテルの故に、イギリスでも長くタブー視されていた<sup>4</sup>。しかし、たとえ否定的な時代であったとしても、その影響を考察するのが歴史研究であるはずで、神学的な価値判断で対象から外すのは問題ではないか。そのように学部生の時に考え、卒論のテーマとしてメアリ時代を取り上げることにした。そのテーマ選択には、テ

<sup>1</sup> 本稿は、2021年2月17日に神戸市外国語大学で行った最終講義をもとにしている。

<sup>2</sup> メアリ治世への否定的な評価が定着したのがいつからかは検討の余地がある。旧来説では、プロテスタント信仰の浸透が進んでいたとされた理解にもとづき、同時代からメアリに否定的であったとされてきたが、そうした見方とは整合しない様々な証拠もあり、フォックスの著作の受容史とも絡んで、さらに研究を進める必要がある。

<sup>3</sup> 世界史の教科書叙述の変遷を、教科内容の骨格となる学習指導要領の変遷と合わせて検証することは、日本における歴史教育・歴史理解の有り様を明らかにする上で必要だろう。

<sup>4</sup> メアリ時代の研究については、近年その様相が大きく変わりつつある。かつてのタブー視の背景にあった宗派的な禁忌が弱まったこともあって、メアリを取り上げた著作が、研究書のみならず一般の読者に向け書かれたものも含めて、多数登場している。とくにジェンダー史に絡めて「最初の女王」という点に着目したものが多い。筆者が論文「メアリ・テューダー：イングランド最初の女王」（『歴史学研究』704号、1997年）を発表した時点ではそういった観点からの研究はほとんどなかったので、その変化は大きい。

ューダー中期を「危険な曲がり角」として、研究が待たれるという越智武臣による指摘（青山・今井・越智・松浦（編）『イギリス史研究入門』1973年、山川出版社）も後押ししてくれた。

そこで取り組んだのが、ヘンリ8世の国王至上法とエリザベスの同法の比較というテーマである。当時の通説は、エリザベスが国王至上法を「復活」させて宗教改革を完成させたというものであった。宗教改革とは16世紀前半ヘンリ8世とエドワード6世時代の事柄であって、メアリ時代という頓挫を経て、エリザベスの即位によって完成する、という理解である。つまり、メアリ時代の意味やエリザベス時代の動きは考慮されず、ふたつの国王至上法に大差はない、ということになる。その理解で良いのかを再検討しようと考えたのだが、もちろん法文の比較といった単純なことではなく、このふたつの法律の間に流れた時間に何があったのかを検証しようと試みた。

対象として取り上げたのが、宗教政策の前線に立っていた高位聖職者である。ヘンリ8世時代からエリザベス時代までに主教位に就いた人物の対応を *Dictionary of National Biography* [DNB] (1885-1900。巻数は補遺版によって異なる。初版は63巻。現行の第2版が刊行されたのは21世紀になってからである) で悉皆的に確認したが、プロソポグラフィのごく初歩的な手法といえるかもしれない。

そこから浮かび上がってきたのが、英雄的な殉教者ではなく、良心と国王への服従の狭間で苦悩し、妥協点を摸索し、消極的に従う「受動的服従」の態度である。そのため、度重なる宗教体制の変化にもかかわらず、人的な継続性が顕著であり、殉教者や亡命者は例外的な存在であった。さらに、こうした服従を選択した人々が、エリザベス時代にも主要な地位につき、その治世を支えていたのであり、妥協を拒んだ不屈の「正義」が「悪」に勝利する、といった歴史では決してなかった。

## イングランド宗教改革の特徴

では、なぜイングランドの宗教改革では「服従」が基調となったのだろうか。帝国議会で毅然と自らの信仰を宣言する「英雄的な」ルターの姿、といった教科書に登場する宗教改革の印象とはかなり異なる。やはり、そこにはイングランドならではの事情・特徴を見て取ることができる。

まず、その発端が、宗教ではなく、政治的な事情にあった点が挙げられる。もしくはヘンリ8世の「個人的な」問題といえるだろう。男子後継者を求めるヘンリによるキャサリン・オブ・アラゴンとの結婚無効を求める訴えの迷走である。もちろん、王位継承者の問題を個人的とってしまうのは問題を矮小化してしまうのだが、上からの改革であって、国民の間にプロテスタント

信仰は根づいていなかったという理解であるといつてよい。

こうした政治主導説に対して、A・G・ディケンズなどは、草の根プロテスタントの存在を強調し、当時のイングランドには宗教改革を求める機は熟していたと主張した。この学説はかつて強い影響力をもったが、現在では、プロテスタント信仰の浸透は不十分であり、人々の大多数は旧来の信仰や教会のあり方に不満を持っていなかったというのが一般的な見解となっており、政治主導という見方は依然として妥当といえる。

また、ヘンリ自身の信仰がカトリック的なものであったことは、その遺言の記述からも明らかで、ローマ教会からの離脱は実現しても、教義の面でプロテスタントの方向に純化することは望めなかった。当初、ヘンリを讃えた初期の改革者もすぐに失望している。

ふたつ目が、イングランドでは王権が強力で、国単位で宗教政策の実施がかなり貫徹した点が挙げられる。大陸では、より小さな領邦や都市単位での宗教改革が語られるし、フランスでは宗派对立から内戦に至っているのとはかなり様相が異なる。こうした宗教政策を支えたのが、議会制定法によって宗教政策が決定され、その実施に貴族ジェントリ（＝地域の有力者）の協力があったことである。政治の中枢には法律家が多く、法には従うという態度も見られた。結果として、教区レベルまで政策が貫徹したが、それは、人々に「逃げ場」がなかったことを意味する。異なった宗派の地域が混在し、移動も比較的容易であった大陸と違い、島国では海が障碍となったし、そもそも庶民の場合、生活手段を考えると、亡命などは現実的な選択肢ではなかった。結果として、人の移動による信仰の「純化」が起こりにくく、異質なものの、反体制的な要素が社会の中に内包されることになった。

そして、三つ目の特徴といえるのが、国王の政策によってめまぐるしく宗教体制が変転したことである。ヘンリ時代だけでも、王妃の信仰も影響して、かなりの振幅があったが、エドワード6世時代にはプロテスタント化が進展し、メアリ時代のカトリックへの復帰を経て、エリザベスによる国教会復活へと至るが、この間わずか四半世紀。多くの人々が異なる宗教体制を経験することになった。人々を翻弄しただけではなく、宗派の変更は、教会設備などの改変を伴い、教区に経済的な負担としても重くのしかかった。なによりも、それまで世界そのものであった宗教に「選択」が生じ、その変更が短期間にくり返されたことは、戸惑い以上に驚天動地のことがらであったし、人々の心に与えた影響は、多元的な価値観に慣れた現代人には想像できないほど深刻なものであったはずである。

信仰という良心に関わる問題について、国王の意向の変化によって翻弄され、国の指示に従うという態度には、現代人の感覚からは、なぜ自らの信念

を貫かないのか、と違和感を持つかもしれない。まず、先に「選択」と書いたが、選択は決して個々人にまかされたわけではない。選択するのはあくまで君主であった。では、君主の意向に反することができたか、といえば、それは無理であった。神が定めた国王への服従は宗教的な義務であり、国王に逆らうことは神の意思に逆らうことと理解された。「神の意思に反する」国王への抵抗を認める理論が生まれてくるのが、まさにメアリ時代であったが、主張はごく一部の神学者に限定され、そういった考えが広く受け入れられたわけでは決してなかった。

国王の求める宗教と自らの信仰が異なる場合、自分が間違っている可能性もあった。宗教に関しては、何が正しいのかを判定する最終的な基準そのものがないのである。ただ、何が正しいのかという問いへの答えは得られなくても、今や宗教とは変わりうるものである、と「不変性」が揺らいだのは間違いない

### 為政者の妥協

こうした状況の中で「妥協」したのは、為政者も同じであった。政策実施に当たっての妥協が人々の消極的な服従を引き出したともいえる。過酷な迫害のイメージが強いメアリ時代においても同様であったことは、フォックスの『殉教者の書』の記述からもうかがえる。先にも触れたように、この書物はメアリ時代のプロテスタント殉教者の顕彰を目的としているが、そういった作品でありながら、「迫害者」が獄中のプロテスタントと討論し、妥協点を摸索する姿がうかがえる。もちろん、説得に成功すれば、プロテスタントの誤謬を明らかにできる、という意図はあるにしても、処刑ありきではなく、説得による救済を優先している点は見逃してはならないだろう。また、メアリ時代に亡命していたフォックスに情報を提供した人物は、取り調べ側においてそのやり取りを聞いていた、すなわち「服従」を選んだ者であったはずである。大陸諸国にくらべてイングランドでの処刑者がかなり少ないという事実にはこのような背景があった。

こうした態度は、体制が変わったエリザベス時代にも顕著である。エリザベス時代には国教会の信仰項目として「39 箇条」の制定が知られるが、条項遵守の宣誓を求められたのは、聖職者と政治家だけで、庶民には求められなかった。通常、プロテスタントでは信仰告白が重要とされるが、イングランドでは、教区民は、年に一度、聖餐式に出席を求められるだけで、信仰内容を問い詰められることはなかった。それどころか、エリザベス女王自身が作曲家バードなどカトリック教徒を保護・支援していたのである。

ウィリアム・セシルやレスター伯などエリザベス時代を支えた人々も、プ

プロテスタントながらメアリ時代に順応し、生き延びてきた。政治の中枢にいなながら抵抗したり殉教した者は少数派であった。さらに視点を庶民にまで広げるなら、大多数はメアリの宗教政策を歓迎したのであり、むしろ「プロテスタント信仰の浸透」や「怨嗟の的のメアリ時代」というかつての定型句は、先にも触れたように、いまでは退けられている。

では、なぜこうした「多数派」の存在が歴史研究で無視されてきたのか。これまでの宗教史は思想を扱うことが中心であったので、その信仰の「正しさ」や系譜をたどることが目的となった。特定の宗派の立場からなされることが多かったため、信仰・思想の優れている点、先駆的な要素といった「質」が重視されることになる。当然、記述や発言が検証対象となり、発言が残されていない人々、何を考えたのかがわからない人々は考察の対象外であったし、たとえ発言が残されていても、その内容にとくに注目すべき点がなければ取り上げられることはなかった。

それでは、こうした声なき多数派を捉えるにはどうすればよいのか。とくに、発言・発信が命の安否に直結するような時代においては、発言がないというだけで対象から外してしまうことは実態を知る上で問題となる。この課題に対して、宗教史でありながら「振る舞い」「行動」に着目したのが八代崇である。八代は『イギリス宗教改革史研究』（1979年、創文社）において、聖餐に関する神学概念である「事効論」を援用し、人々がどう振る舞ったのかを考察の対象に取り込んだ。国教会では信仰告白が求められず、エリザベス時代においても、聖餐式に出席することだけが求められたことも、神学的には同じ理解になる。この内面を問題にしないという点は、他の多くのプロテスタント宗派との重要な相違点であり、イングランドでの宗教改革が独自の展開を遂げたことの根底にあるとあってよいだろう。信仰を各人がどう解釈するかは問わず、行為を重視する立場は、広範囲の人々の「取り込み」を可能にした。八代の研究はあくまで国教会の神学（本質）を明らかにすることを目的としていたが、研究手法として応用して「どう振る舞ったか、行動しなかったか」を検証することで、宗教改革の実態の一端を明らかにすることができるかと筆者は考えた。

そして、時期を同じくして、社会史が歴史研究の大きな流れとなっていたとことも重要である。社会史の手法のひとつとして、質よりも数量に注目することが挙げられる。旧来の宗教史や教会史では、「正しい信仰」が出発点であり、その到達すべき目的地でもあった。当然、著名神学者の思想や殉教者といった、質を重視する立場になる。厳しい見方をすれば、立場の「正しさ」は自明とされるので、結論が揺るぐことはない護教論になってしまう。それに対し、社会史の手法では、数（量）に着目することで、多数派はどう

であったのかを明らかにすることができる。その結果、本人はあまり自覚していなかったが、筆者の研究は教会史でグラフを多用した最初期の例（少なくとも日本では）となり、学会報告の際、多数のグラフを載せたレジュメを配布してかなり驚きをもって受け止められた。

## 服従と妥協

すでに触れたように、大多数の人々はメアリによるカトリック復活を歓迎したが、それは、エリザベス体制下では、渋々国教会に従ったということの意味する。当然、服従と妥協はエリザベス時代でも重要になる。エリザベス体制の政治の中枢を担ったのはメアリ時代に恭順してきた者であったことは、その方針に少なからず影響したと考えてよいだろう。まず、メアリ時代の高位聖職者に協力要請がなされたが、期待に反してメアリ時代の主教でエリザベスに協力する者はなかった。主教の協力がなければ、国教会にとって重要な「教会の継続性」が危うくなる懸念があったが、メアリ時代に職を追われていた元主教を駆り出すことで、乗り切っている（のちにこの処置の正当性が問われることになる）。しかし、協力を拒んだからといって、それを理由にしての肅正は行われていない。また、教義も解釈の幅を広くとり、いわゆるピューリタンなどの批判を受けながらも、曖昧なままにしている。しかも、教義を最終決定するのは議会であって、教会ではなかった。つまり政治的な配慮が働く余地が残され、純粹に神学の問題とはされなかったのである。

一方で、イエズス会による体制転覆の試みには厳格に対処しているが、それはあくまでカトリックという宗旨に対する弾圧としてではなく、体制転覆を図った大逆罪という政治犯としての取り締まりであった。これはエリザベスの巧みさ（狡猾さ）を示すものとしてよく知られているが、それ以上に重要な要素をはらんでいる。宗教的な異端（誤り）として取り締まりや処刑を行う場合は、メアリ時代がそうであったように、神学議論は不可避であった。その正否は水掛け論になってしまうし、相手方に利用される殉教者を生み出してしまふ。神学論争を避けて、体制への服従か否か、ローマ教皇に服するか否かを問うということは、信仰の問題を政治の問題に転化して、「正しき」を議論しないということであり、その後のイングランドの枠組みを決定づけたといえる。

ここであえて「近世イングランドの宗教とは何か」と問うならば、「政治的にカトリックではない」ということができるだろう。スペインとの戦争が続く中、「反カトリック＝反スペイン」がイングランドという国のアイデンティティとなってゆくが、それは神学の問題ではなく、あくまで政治的なもの

のであった。

できるだけ多くの人々を取り込むためにお互いが妥協点を探ることは、宗教的に「純化」を目指すのとは正反対であり、「宗教第一」ではない社会への歩みとなったことは間違いない。宗教を個人的・内的なものとして捉える近代的な心性への歩みが始まったのである。それは、宗教改革以前の、宗教が人を包むように外側にあり、世界そのものであったのとは大きく異なる。

当然、エリザベスのこうした方針に対して、宗教を世界そのものであると理解し、「正しい」宗教のために純化を求める勢力からは批判が向けられることになるが、たとえプロテスタントであっても、服従の枠を外れたならば、カトリック同様、政治犯として処罰・処刑の対象とされた。

信仰という「内面」より国教会への服従という「外形」を重視し、信仰告白を求めない国教会とは、極言すれば、「神学なき宗派」と表現できるのかもしれない。そうしたあり方が「服従と妥協」、すなわち建て前と現実の両立を図ることを本質として組み込んだ教会として存続することとなり、近世を通じてプロテスタント非国教徒を国教会に引きこむための努力が続けられた。また、国教会内部にも、よりプロテスタントに傾斜した「低教会派」やよりカトリック的な要素に傾斜した「高教会派」を生み出す素地を持つことになり、現在に至っている。

信仰を求めない教会は、一方で世俗化の方向に進むことにもなる。体制に順応する人々が圧倒的多数派を占めた国教会では、18世紀になると、信仰の場というよりも社会的な権威や階層を示す場となり、貧しい庶民が礼拝から遠のいていく。その結果、19世紀になると、下層階級ではキリスト教信仰そのものもおぼつかない者も珍しくなくなってしまふ。これもまたイングランド宗教改革が生み出したものといえるだろう。

エリザベス時代は、女王の神格化が進んだことでも知られ、神格化はスペインとの戦争と並行して進み、アルマダ来襲以降に顕著になっている。この現象も、信仰を曖昧にした国教会のシンボルとして女王が機能した考えることができるだろう。宗教改革で否定されたマリア信仰の代替という説もあるように、エリザベスに何らかの宗教性が付与されていたと思われる。それがどの程度意図的なプロパガンダの成果であるのかは、その方策なども含め、さらに検討すべき課題であるが、エリザベスが死後もプロテスタント国家イングランド／反カトリックのシンボルであり続けたことから、エリザベスを他の国王とは異なる特別な存在にしたのは間違いない。

エリザベスが特別な存在となった裏返しとして、その影としてのメアリ時代が強調されることになる。エリザベスの治世が生み出した教会を正当化す

るには、メアリは否定されなくてはならなかった。しかし、すでに述べたようにメアリの時代が「反動」ではなかったならば、エリザベス時代の評価も大きく変わるはずである。

メアリ時代評価の見直しから、エリザベス評価の変遷、イギリスにおけるカトリックの実態を明らかにすることで、リンダ・コリー説などとは違った意味での、新しい近世・近代の「プロテスタント国家」イギリスの姿と内実が浮かび上がってくるだろう。

## おわりに

最後に、堅実な歴史研究から少し離れ、現代のわれわれと結びつけて本稿のまとめとしたい。本稿では、宗教改革をメアリの時代から見ることで、旧来の「殉教者＝英雄＝正義」史観とは違った姿が現れることを示した。同じ様に、エリザベス時代をカトリックの立場から見てみると、従来の歴史像とは違った姿が見えてくる。トマス・モアやメアリ・ステュアートなどの悲劇が並ぶ「カトリック迫害の歴史」として描くことが可能であり、その先には19世紀のカトリック教徒解放が控える苦難と解放の歴史となる。

宗教改革の混乱／悲劇は「正しさ」「正義」同士のぶつかり合いであったことは再度確認しておきたい。そこには客観的な正しさはあり得ず、古い宗教改革史のような、一方的な「正しさ」を自明とする宗教史（宗派史）の立場から離れると、ひとつの視点（価値観）からの歴史の危うさも浮かび上がってくるだろう。たとえ事実はひとつであっても、真実はひとつではない、ということである。

宗派の立場による真実や正義を前提にしてしまうと、そこが出発点となり、出発点にいたるまでの問題や背後にあった混乱や困惑が無視され、見えにくくなってしまう。歴史研究は一般的に「真実」「事実」を確定する学問と思われているが、少なくとも宗教史はそのままでは該当しない。

特定の宗旨を持たずに宗教史を研究してきたことで、多面的に、バランス良く、裏から・表から、立場を変えて、物事を見るという態度が身についたかもしれない。こうした自明とされる「正義・正しさ」を鵜呑みにせず、先入見を持たずに対象に向き合うことは、宗教史に限らず、歴史研究にとって重要であると同時に、現代の世界を見る態度とも重なってくるだろう。

正義や正しさといった拠って立つ基盤が定まらないことで、不安を感じるかもしれないが、性急に足場を求めないことも、多様化する現代において重要である。性急に白黒をつけて「敵」を設定し、分断を深める現代への警鐘ともなるだろう。多面的な考察は、一面的で単純な主張にくらべてインパクトが弱く、言説の洪水の中で埋もれてしまいがちであるし、相対主義として

批判されるかもしれない。しかし、特定の価値観を絶対的なものとみなすドグマの危うさとどちらを選ぶかという選択であるならば、相対的に物事を見るバランス感覚こそが、現代社会に必須のリテラシーであることは間違いないだろう。